変容するエビス

——響灘沿岸地域のエビスマツリを中心に——

吉留　徹

1　はじめに

エビスといえば、七福神の一人として折烏帽子に髯を生やし、満面の笑みを浮かべ、手に竿と鯛を持ったエビス像が表象されよう。またエビス神社といえば兵庫県西宮、大阪今宮戎神社、島根県美保神社をはじめ大小様々な多くのエビスを祭祀した神社がある。「恵比寿・夷・蛭子・胡・戎」などの字をあて、日本全国いたるところに祭祀され、漁業者にあっては豊漁祈願、農業者とっては五穀豊穣祈願の対象、商業をおこなう者にとっては商売繁盛の神と様々な生業、職能神として複雑多様な神として現在でも多くの人によって信仰されている。またその祭祀者は個人、あるいはエビス講など信仰、生業的な集団、あるいは氏神、産土神などの氏子集団など様々な祭祀集団による構成員と信仰によって生きる現代的な民俗神の一つである。

エビスの「文字」による分析からは、①「夷」という字が宛てられるところから「鄙とか辺境、力強く荒々しい、遠くから寄り来る、異様な性格の神」との神性を有すものとして、②「蛭子」・「蛭児」の字が宛てられるところから「記紀神話のイザナギ・イザナミの初子「ヒルコ」として誕生し、不具の子として流される漂着神伝承も有した神といわれる。

民俗学においては、エビスについてその創成期より柳田・折口をはじめ多くの先学が研究対象とし、多くの研究成果を出している[1)]。

その方向性の大枠としてはⅠ.エビス神の原初的形態およびその神性に関わる研究、Ⅱ.エビス神信仰の構造的あるいは機能的分析に関わる研究、Ⅲ. エビス神信仰の地域的な展開と発展に関わる研究に分類されよう。

Ⅰについては、折口が「壱岐の水」で指摘しているように、「りょうエビス」（祠に祀られている）と「エビス」という二つのものがあり、その原初的形態について「エビス」が「鯨の胎児」を供養したもの（＝死んだ動物（胎児）に対する崇拝）であることに言及し、「海」の彼方から「寄りくる」ものにある種の神性を感じる「マレビト信仰」として古い意識のなかで考えられる「エビス」の存在を明らかにした。（折口 1967: 408-409）それに対し、柳田は専ら漁業者の信仰として考えられる「エビス」のなかに農業者が信仰する田の神との関連を見出し、その変遷とともに日本の民間信仰の原初的形態に言及している（柳田 1969: 29）。また中山も「エビス」の起源を「富をもたらし、海に寄り来る鯨」であることを指摘している（中山 1984）。

Ⅱについては、水死体を「エビス」とする壱岐勝本浦の漁民習俗に着目し、日本の民間信仰の構造全体について「ハレ・ケ・ケガレ」を分析概念として導入し、構造的あるいは機能的分析をおこなった波平によって、「エビス」が境界領域に属し、「ケガレ」（＝不浄・不

具性）を内包し、福と災厄を有するエビス神のもつ神格が両義的な属性であることを明らかにしている（波平 1978: 352-353）。

Ⅲでは桜田や川崎をはじめ多くの研究者によって地域的におこなわれるエビス信仰の分析およびその展開について明らかにされている（桜田 1968、1980、川崎 1984）。北見はエビス研究を体系化し、川崎の研究成果を踏まえ「エビス」の原初的形態が南方系にあることを指摘している（北見 1991）。また田中らによって全国的なエビス神信仰について、ほぼ全容が明らかになっている[2)]。田中は資料の地域的遍重は否めないとされながら、地域に伝承されるエビスの実態から、東日本では農村部における家族（個人）祭祀による去来伝承をともなうエビスが多くみられるの対し、西日本では漁村部に共同祭祀による寄り神的性格が強いという、東西地域によるエビス神信仰の差を明らかにし、エビス神の特徴として、①福神的性格、②寄り神的性格、③不具神的性格をあげ、②が①より古い本来的な性格であるとしている（田中 2003: 3-7）。

ただ、田中らがおこなった中国地方の調査に関していえば、主に広島県や岡山県域の瀬戸内地域のエビス神であり、日本海、瀬戸内海、周防灘、響灘に囲まれた山口県域内のエビス神の全容についてはまだ解明されていないのが現状であろう。

そこで、本論ではその手始めとして山口県西部の響灘沿岸の漁業地域におけるエビス神を取り上げ、それがどのように祭祀され、信仰されているのか。エビスマツリにみられるエビス信仰の実態とそこに表象され、そして変容していくエビス神を探ってみたい。

2　表象されるエビス神―現在に伝承されるエビス

最初に、響灘沿岸各浦におけるエビス神について、現在に伝承され、あるいは実施されるエビスの社祠やエビスマツリを通し、エビス信仰の実態について検討してみたい。

2.1　地域の概況

山口県西部に位置する響灘沿岸は冬季には波が高く、漁業するのが大変だったといわれる地域である。江戸期には、北前船の西回り航路としての港や風待港もあり、蓋井島、角島等では福岡鐘崎や大島からの海女や九州西海地域の鯨組の入漁もあった地域である。旧下関市域ではかつては汽船底引きトロール船、機船底引き網の根拠地として、また近代以降の捕鯨産業を担ってきた海港都市として栄え、旧豊浦町から豊北町地域にかけては大敷網発祥の地とされる湯玉を擁し、壱岐・対馬をはじめ長崎五島等への出漁、また明治期には遠洋延縄漁で韓海出漁する浦も多くあった。大正から昭和にかけては石川県からのイワシ流し刺網漁の入漁があるなど、近世から人やモノ（物資）が盛んに交流する地域であった。

響灘沿岸の漁浦には粟野、角島、島戸、阿川、肥中、特牛、和久、矢玉、二見の 1 島 8 浦の豊北町と湯玉、小串、松谷、涌田（黒井）、室津の 5 浦の豊浦町、それに吉母、吉見、安岡、伊崎、彦島（南風泊、海士郷）、蓋井島、六連島の 6 浦と 2 島の下関市があたる。

これらの地域は平成 17 年に合併し、現在は下関市になっている。また、角島、黒井の 2 漁協は単独漁協として独立、これらを除いた各漁協は同年に山口県漁業協同組合に合併している。ちなみに平成 25 年「下関市水産統計表」による「漁業協同組合（支店）別漁業種類別延べ経営体数」（角島および黒井漁協含）によると全経営体数 1,641 のうち採買・採藻 29.3%（481）〔以下（　）内の数字は経営体数をあらわす〕、一本釣 33.0%（541）、建網 10.8%（177）がほとんどで、他に旧下関市域にかご、いか巣網、枡網漁がみられ、小型底引き網、ゴチ網が彦島（海士郷）においてみられる。また、棒受網が角島にみられる。かつての地域的な特徴であった延縄漁はわずか 2%（34）になっている。また大型定置網は蓋井島（1）でおこなわれている程度で、ほとんど家族や個人でおこなわれる小さな漁が主体となっている。

2.2　各浦のエビス神とその祭祀

各浦におけるエビスおよびエビスマツリの概要を「名称・祭神名・祭日・内容：由来伝承（祭礼のあり方）・仕様」を指標にまとめたものが、表－1【響灘沿岸漁業地域のエビス神一覧】である。本論末に掲載してあるので、各事例番号と対応してみていただきたい。なお、比較資料として江戸期に編纂された地誌類等にあらわれるエビスも入れている。

〔名称・祭神〕エビス神については「エビス」あるいは「(オ) エベッサン」という名が聞かれる。文字であらわす場合は各浦様々であるが、同浦の同じエビス社でも「戎」と「蛭子」という字が使用されるところがあり、江戸期の地誌類にみえる神名とは時代とともに変化している浦が多い。祭神名については知らないという人あるいは「コトシロヌシサン」という祭神名をもって聞かれる程度である。明治期には神社側の提出した『旧豊浦藩神社明細帳（諸社明細書　豊浦藩)』では「言代主命」として文字上では統一化されているようであるが、一方で江戸期の資料にはでなかった角島、蓋井島でも明治期以降にはエビス神の名が表出している。江戸期には阿川浦には「夷三郎殿」とあり、西宮戎との影響を窺わせるものがある〔事例 2〕。また祭祀については、「エビスマツリ」、「エベッサンマツリ」という「エビス」の名をいれたところ、「リョウシノマツリ（漁師の祭り)」、あるいは「春祭り」や「秋祭り」といった「エビス」を用いない季節そのものを祭りの名称としているところもある。

〔祭日〕柳田によれば、10 月 20 日を農村では講（エビス）の日、商業地では正月を祭日としているとされる（柳田 1969: 29)。瀬戸内漁民がおこなうエビス祭りは 4～5 月にかけて始まる漁の豊漁祈願として 3～4 月に実施されるというが（松田 2003: 28)、響灘沿岸地域では 4～5 月の春祭として実施される地域と 11 月の秋祭りとして実施される地域が多いようである。また現在 4～5 月に実施する浦でも江戸期の資料等では 11 月に実施しているところが多い傾向がある〔事例 6・8〕。現段階ではまだ確証はないが、11～3 月にかけての時期はちょうどイワシ網漁の時期が始まって終わる時期であり、その始まりとそれが終わる時期とも関係しているのかもしれない。現在では旧例を維持するところも見受けら

れるが、実施月はそのままで多くの人が集まりやすいように土、日曜日に変えるところが多くみられる。

〔場所・仕様〕港湾整備などでかつての場所から移動しているものがいくつかみられるが、漁協近くに移動している。また、社殿形式をとっているものがほとんどで、石祠（屋敷型）のものが2例〔事例21・23〕、拝殿だけを造り、奥に石祠がある形式のものが安岡浦に2例がある〔事例17・18〕。特に事例17には4つの石祠がある。この石祠についての伝承は今回確認できなかった。

〔祭祀内容および由来・伝承〕響灘沿岸各浦に祭祀されるエビス神は、概して豊漁を願う漁神として認識されているものが多い。かつては「エビス籠り」といい、蓋井島などには「籠もる」習俗がみられ、また小串のエビス祭りでも「エビス籠り」という名が残っているが、現在実施されるエビスマツリの多くは、各浦のエビスを祭祀した場所で神事をおこない、神輿に神霊（ご神体等）を入れ、海上へ神輿を出し、フライ旗（大漁旗）をあげ網代めぐりをおこない、その後陸上の浦地域を巡り、最後に餅撒きをおこなうという形式である。

祭りの組織は、かつては浦の漁業者（オオセンドウとよばれる船頭、網頭や若連中等）を中心にしておこなっていたものが、現在ほとんどが漁協および漁協支店を中心とした組織で、祭りの運営をおこなうように変化してきている。子ども神輿を出すなど、祭りの参加者を集めるとともに、小さい頃から祭りを体験させ、継承する世代育成をおこなっているものの、祭りの担い手である若年層が都市部へ流出し、高齢者が多くなり神輿を担ぐ人がいなくなったため、車で運んだり、近くに大学があるところでは大学生が神輿持ちになったり〔事例20〕、さまざまな方法や形式で祭りが維持されている。

エビス神の由来伝承については、現在ではほとんど聞くことができなくなっている状況である。伊崎浦では竜宮の使いとして亀に乗って海底から福の神としてやってきたエビスの由来が聞かれる〔事例19〕。また、エビスの耳が悪いという事例が豊北地域で聞かれる。現在ではエビス社が神功皇后神社に合祀され社祠は存在しないが、豊北町土井ヶ浜で7年に1度山側の田耕神社から「イチキシマノカミ」厳島神社の女神と、海側の神玉にある「コトシロヌシノカミ」蛭子社（神功皇后神社合祀）の男神が合う「浜出祭」（山口県指定民俗文化財）の祭日由来譚にも、「エビス様（コトシロヌシ）は耳が悪いので1年後というのを7年後に間違えたから」という伝承と関係がある[3)]。実際の漁をおこなう場合、潜水漁の際に潜る前や網を入れる場合にと「トーテベス」という「唱えごと」をおこなうが、これに着目した伊藤はこれらの例から「エビス」が「音」に関連する神霊であることを指摘（伊藤 1979：327）し、さらには潜水漁に携わる「海人は氏神などの上位の神ではなく、みずからの生業を守護してくれる下位の神々をもって移動し、それを奉じる」（伊藤 1990: 393）として、移動をともなう潜水漁に携わるものにその信仰があると考えている。

かつて六連島や蓋井島では不漁の際に海底からご神体の石を拾いあげる話が報告されている（国分 1957: 34-35、37-38、1960: 7、8-10）が、両島でもすでに実施されておらず、

詳細な内容はわからないが、蓋井島ではその話をまだ聞くことができる〔事例 22・23〕。それとは別に阿川浦、湯玉浦ではかつて不漁の際にはエビスの神体（石・木像）を船につけて網代をめぐるという話が伝承されている〔事例 2・10〕。しかし、北部九州でみられるような水死体をエビス神に祀る伝承は聞けない。なお、水死体については「ホトケ」といい近くの浜や寺で無縁仏として供養するという話が聞かれる程度だが、六連島のエビス祠の横には三界万霊塔が祭祀されており、また戦争時分には多くの遺体が島にあがってそれを浜辺にトメタという話は聞かれ、これが豊漁を促すかどうかの具体的な内容までは今回の調査では得ることができず、今後の課題として残る。

3　まとめにかえて—変容するエビス—

響灘沿岸の漁業地域の多くの浦において、漁業で繁栄していた時代のかつての盛大な漁浦の祭りは次第に姿を消し、簡略化しながら、細々とあるいは形を変えながら、現在でもエビス神は祭祀され、エビスマツリはおこなわれている。

これらのエビス神に関わるエビスマツリは、その実施する内容から、Ⅰ．年中祭祀として定期的に実施されるエビスマツリと、Ⅱ．マンナオシとして不漁時に臨時的におこなうエビスマツリに大きく分類されよう。

Ⅰ．については「本物のリョウシ（漁師）がいなくなった。」という声を各浦で聞くように、年金漁師[4]が増え、若い世代の漁師がいなくなるなかで、かつてのオオセンドウや青年団等各浦の組織を中心とした運営から漁協が中心となった組織のなかで実施されるように変化してきた。かつての浦全体の祭りとして盛大におこなっていたものが次第に維持できなくなりつつあるのが現状であろう。フライ旗をあげて海上の網代巡りをおこなう地域も少なくなり、神輿を出すのも後 10 年すれば難しいという声もあがる時代となった。しかし、涌田浦のように旧来の浦という地域共同体だけではなく、地域全体のなかにある特定グループ、例えば奉納芸能という位置づけのなかで文化芸能大会が企画され、その実施団体として組織された涌田地区文化芸能というグループ、が秋祭りと一緒になったような形式で実施され、浦から地域全体の秋祭りとして実施されるところがみられる〔事例 13〕。また、角島のように江戸期の資料には「エビス」の名をみない、いわば主要な神（社祠・祭神）として認識されていなかった島では、明治期の漁業紛争により、漁業権を獲得した記念を契機に「エビス」が漁業の神として重視され、現在でも海を巡り、島内を巡る島全体の祭りとなって実施しているところもある〔事例 4〕。

エビスマツリとは別の日に「ハマゴモリ」、「オコモリマツリ」など海上安全祈願をおこなう「お籠もり」がエビス社で実施される例が安岡浦ではみられる〔事例 17・18〕。蓋井島や小串浦ではかつては「エビス籠り」という名や習俗があったように〔事例 11・22〕、エビス社のところに漁師が集まり、酒肴で一杯おこなっていた「マツリ＝（籠もり）」という、いわば「神を迎える」簡素な儀礼が、木造船から FRP へといった漁船の変化や漁具・漁法といった漁業技術の発達、それらにともなう飛躍的な漁獲量の増加を促し、浦に富と

繁栄をもたらしていった明治以降に近代化し、発展していく過程のなかで、浦でのエビスマツリは、地域全体の氏神祭礼と同じような御神幸による「積極的な神迎え・神渡り」の祭礼がおこなわれるようになっていくような過程をも想起させる。

今回の調査で得られた数例から速断はできないが、響灘沿岸地域のエビスマツリには行事を通して、ⅰ．地域の氏神祭祀と一緒になって実施する：合同祭祀型〔事例 14・17〕、ⅱ．神事など儀礼的な部分は維持しながら、多くの参加者を求める：イベント重視祭祀型〔事例 4・13〕、ⅲ．現在の浦だけで旧来の祭りを維持していく：現状維持祭祀型に分類できるかもしれない。なお、これらが複合して地域の実情にあわせて実際にはおこなわれている。

Ⅱ．の不漁時に何らかのエビスの神体への働きかけについては、２通りの方法が伝承として確認される程度で、実際には個人々で対応しているのが現状であろう。

１つには甑島・薩摩半島南岸および大島半島南岸から東岸にかけて、三島（竹島・硫黄島・黒島）種子島にかけての九州南部地域で顕著にあらわれる習俗で、海中（底）から石を拾い上げて新しい神体とする南方系海底捜神型とよばれ[5]（川崎 1984、北見 1991: 256-258）、「海底や海の彼方を神霊の国として、そこから出現するものを聖なるものとする思考」（桜田 1968: 63）がそこには見出される。

この南方系海底捜神型に属する習俗が六連島、蓋井島で確認できる。いずれも江戸期までは農業主体で明治以降に漁業へ転換していく地域であり、鐘崎海人が入漁し、潜水漁をおこなった地域である。

前述のように現在の六連島では、海から石を拾いあげる習俗はなく、エビスも石積から新しい石祠ができ、石を拾いあげる伝承そのものも聞かれないようになっている〔事例 23〕。蓋井島でも同様に習俗そのものは実施されないが、現在でも伝承は残り、エビスを祭祀した場所（小社内）には神体の石だけでなく、流木や様々なエビス像など「海から寄りつくもの」や祀り手がいなくなって「捨てられたもの」（漂流する神像）など様々な形態のものが置かれ、一緒に祭祀されている〔事例 22〕。また角島ではエビスの伝承は聞かれないものの、福岡県大島や鐘崎のアマが入漁し、エビス祠に石をそなえる〔事例 4〕など、北部九州および潜水漁業との関連を窺わせる。

それとは別に２つ目として不漁の際にエビス像あるいはエビス石があり、その像や石を船につなげて網代を回る地域が湯玉～豊北地域の一部に聞くことができる。上記のような神体の変更はなく、木像や石の神体を海に持ち込み海のなかを巡るということがおこなわれる。筑前志賀島の祭りに人形を乗せて沖に出て、船のなかから其の人形を突き出して海中を覗かせるという事例があるが（折口 1966: 320）、これよりさらに進んで神体を乱暴に扱うような行為をともなう。弱まった神霊を海に入れて浄化させ復活させるという[6]思考の反映とも思われるが、エビスという神体（石や木像物）に魚を寄せるという属性（桜田 1968、1980）が本来あり、そこには年中儀礼として船にエビスを神輿に乗せて網代をめぐるという行為（通常の行為）だけでは祈願が足りないと意識され、直接海に入れるという

行為（手段）をとり、神体を海に返還することにより、神体は何度も繰り返しリセットされる、いわば「巡回神型あるいは循環神型」ともいうべきエビスをそこに見出すことができよう。

エビスの神体について、川崎は「不定期に訪れる神（漂着神型）」が漁業の発達、組織化にともない「定期的に祭祀される海底の石（海底捜神型）」への変化を説いたが（川崎 1984：69）、現在のようにＧＰＳ機能搭載魚群探知機、レーダー、スマートフォン等情報機器の発達により、天候の変化、魚群の探知など様々な情報の収集、伝達、情報交換がいつでもどこでも瞬時にできるようになり、またかつてのような感覚や経験による「民俗知」から科学技術による実証データ（数値）といった「科学知」を併用するような時代では「巡回神型あるいは循環神型」のようなことを実施することもなくなっている。

定置網やかつてのイワシ流し刺網のような集団漁が次第になくなり、磯見・一本釣・延縄漁といった個人（家族）漁が主流となり、「生業」を通して「互いの」連帯意識が少なからず希薄化し、漁業を支える基盤も大きく変化するなかで、かつてのような深刻な「不漁」（地域を崩壊をもたらすような、戦時下の漁業体制下のような生計が成立しない）を実体験としてもたない世代となり、海に対する信仰をはじめ、さまざまな「規制」（しきたり）をもって地域を維持してきた伝承システムそのものの拘束性もなくなり、伝承としては存在しているものの、現実から次第に乖離しつつある。

「魚がいなくなった。捕れなくなった。」という話は聞くものの、漁業がだめなら他所へ移動、転職するなどの様々な自由選択があるなかで、地域に残り、家業として漁業を継承して続けること自体、個々人（家）の選択による場合が多くなり、エビス神をはじめとする神仏への祭祀はもちろんのこと、漁業に対する価値観も複雑化している。

地域を支えていた相手を互いに「思いやる」思考（湯川 1998: 163-165）は、生活共同体としての小さな神であるエビスやエビスマツリを通して意識され、育成されていくものであろう。少子高齢化や地域改変など漁業を取り巻く環境は絶えず変化のなかにあって、エビスの変容は地域が何を選択してきたのか、選択せざるをえなかったのか。その「個々の人間の主体的判断と選択の累積」（湯川 2010: 95）による歴史を映し出す鏡にほかならない。今回調査不十分な面もあり、聞き間違いも多分にあろう。今後、県内の他地域の状況をつぶさに見ていき、漁業をはじめ市に祭祀されるエビス全体の変化変容を考える必要があろう。その上で再度検討してみたい。

【追悼】湯川先生とは『山口県　民俗編』が御縁でご一緒に仕事をさせていただきました。日々生きる人々の視点に立ち、暖かい眼差しを向けて調査研究される先生の姿に、変動する時代に生きる私たちの「生き方」にこれからの民俗学の重要性、可能性について学ぶ機会を与えていただきました。記して哀悼の念を示すとともに感謝いたします。

［注］

1) エビス神の信仰については、すでに北見俊夫編『恵比寿信仰』民衆宗教史叢書 28 巻（1991 年雄山閣出版株式会社）、吉井良隆編による『えびす信仰事典』（1999 年戎光祥出版株式会社）、あるいは宮本袈裟雄編『福神信仰』民衆宗教史叢書 10 巻（1987 年雄山閣出版株式会社）等でエビス神に関する著名な論考が提示され、また多くの参考文献が記載されており、大正～平成にかけての資料が確認できる。

2) 田中宣一は成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい全国エビス信仰調査報告書』（2003）で各県のエビス神の民俗事例、文献資料の集成をおこない、エビス信仰分布図として「海中の石・水死体・供物・去来伝承・盗み・女性伝承」の指標を設定し、エビスの多様性と地域的な特性を明らかにしている。

3) 「浜出祭」および「蛭子社」については拙稿「浜出祭覚書—浜出祭由来伝承の形成と展開—」『人類学ミュージアム研究紀要第 5 号』（2010）および「民俗的環境－「鬼」と「骨」が語る民間伝承－」『土井ヶ浜遺跡　第 1 次～第 12 次調査報告書　第 1 分冊「本文編」』下関市文化財調査報告書 35（2014）を参照されたい。なお、本論では漁業地域のエビス神ということで土井ヶ浜の「夷社」は取り上げなかったが、蒙古来襲の際に討伐された戦死者の霊が祟りをなすため、敵将の首を祭祀したという伝承を有す。

4) ここでいう「年金漁師」は中学生頃までは漁を父親世代と一緒におこなっていたが、その後進学、就職して、地元を離れ（あるいは地元に就職しても）、サラリーマン等別の業種に勤務し、定年退職後に地元へもどり漁をはじめ、年金を受給しながら漁をおこなう人、あるいは高齢となり、漁業を続けることは難しいが、健康と多少の生活費のためにおこなう人、いわば「年金」という毎月ある一定の給付があるが、「年金」だけでは生活できないために漁業をおこなう、趣味と実益を兼ねた、漁業を生業（なりわい）としない漁師と定義する。

5) 川崎晃稔は九州南部のエビスを体系づけ（川崎 1984）、北見俊夫はさらにそれを漂着神型・海底捜神型に分類（北見 1991）しており、ここではそれを合わせた形で「南方系海底捜神型」としている。

6) 佐々木長生は「浜下りの場－漂着神伝承、海辺の聖地に関連して」福島県立博物館編『福島県における浜下りの研究』福島県立博物館調査報告書第 28 集（1997）で弱まった神霊を復活再生するために浄化祓による禊として、浜下りの場所が海辺の聖地として漂着神伝承があることを指摘している。

［文献］

伊藤彰，1979，「漁業の民俗」長門市史編纂委員会編『長門市史民俗編』.

————，1990，「鐘崎と海人文化」宮田登編『玄海灘の島々』海と列島文化第 3 巻 小学館.

折口信夫，1967，「壹岐の水」『折口信夫全集』15 中央公論社.

————，1966，「偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」『折口信夫全集』3 中央公論社.

川崎晃稔，1984，「南九州のエビス神」『日本民俗学』151.

北見俊夫，1991，「エビス神信仰と異人論」同編『恵比寿信仰』民衆宗教史叢書 28 雄山閣出版.

————，「東シナ海の海人文化」網野善彦編『東シナ海と西海文化』.

北見俊夫編，1988，『日本民俗学の展開』雄山閣.

————，1989，『日本海島文化の研究』法政大学出版.

国分直一他，1957，「蓋井島村落の歴史的，社会的構造」『農林省水産講習所研究報告』人文科学編 3.

————，1960，「六連島村落の社会と構造」『農林省水産講習所研究報告』人文科学編 5.

桜田勝徳，1968，「漁村におけるエビス神の神体」『漁撈の伝統』岩崎美術社.

————，1980，「漁村民俗誌」『桜田勝徳著作集』1 名著出版.

田中宣一，2003，「エビス信仰概説」成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい全国エビス信仰調査報告書』.

中山太郎，1984（初出は 1922），「えびす神異考」『郷土趣味』第三巻第七号－第十一号復刻版第三分

冊 岩崎美術社.
波平恵美子, 1978, 「水死体をエビス神として祀る信仰－その意味と解釈」『民族学研究』42(4).
松田睦彦, 2003, 「瀬戸内漁民のエビス信仰と漁期－祭日の考察から」成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい全国エビス信仰調査報告書』.
柳田國男, 1969, 「年中行事覚書」『定本柳田國男集』13 筑摩書房.
湯川洋司, 1998, 「民俗の生成・変容・消滅」赤田光男他編『民俗学の方法』講座日本の民俗学Ⅰ.
――――, 2010, 「ムラの仕組みと相互扶助」山口県編『山口県史民俗編』.

表－1【響灘沿岸漁業地域のエビス神一覧】

		名　称・祭　神	祭　日	場所・仕様	内　　容	各浦の漁業概要
旧豊北町	事例1 粟野浦	戎社（記載無）	4月第2日曜日	粟野浦港沿北東にある。 切妻平入木造銅板葺　小社 北西向（海に面す） にエビス塑像１体 （彩色　風折烏帽子　鯛と釣竿を持つ） 社の背後にセメント造りの石祠があり、なかに2個の自然石がある。由来については網にかかったものではないかというが、不明。 鳥居「明治二十五年三月十一日」刻名	恵比須神社にて神事後、神輿を出し、船に乗せアジロマワリ（網代巡り）をおこなう。神輿と神主を船に乗せ、網代周りをして豊漁を祈願する。祭礼の日は、全員休漁する。違反した者は罰を受ける。 網にかかった石をエビスとして祀る。 （『中国・四国地方の石の民風』）	廻船の基地として栄えた浦 川（粟野川）と海の漁がある。 〔川漁〕 底見漁：青海苔（川） 四手網・投網・ウケ漁：白魚（川） 〔海漁〕 磯見漁：ワカメ・ウニ等貝藻類 ヨダキ（一本釣漁）：アジ・サバ・イカ等 漕釣漁：シイラ・サワラ等 網漁：タイ網・手繰網（ゴチ網）・ツツキ網（アジ・タイ類）・壺網・八田網(イワシ）を実施していた。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・建網 ブリ／ヒラマサ・イカ類・サザエ
	事例2 阿川浦	蛭子社 （●夷三郎殿）	11月3日	阿川浦の日和山松陰亭下、大社と同境内敷地にある。 切妻平入木造銅板葺　小社　南西向 修繕改修碑「大正十二年十二月」刻字 昭和十三年石造玉垣・平成九年十月改修	神輿と神主を船に乗せ、神宮岬と竜宮瀬の網代周りをして豊漁を祈願する。祭礼の日は、全員休漁する。違反した者は罰を受ける。豊漁祈願としておこなう。2年に一度餅撒きをおこなう。その時には阿川小学校3～6年生が4.5人でエビス舞を舞う（平成24年相当年）。蛭子神社・ジュウリンサマで神事、エビス舞をおこない、その後船に神輿を乗せアジロマワリ（網代巡り）をする。もどって来て漁港（阿川漁協：現阿川支店）前でエビス舞をおこない、餅撒。このエビス舞は旧藩時代に大谷甚吉が大阪より伝えたものという。現在でも折烏帽子に鯛・釣竿を持った七福神のエビスの格好をして舞う。	「ナワドコロ」とよばれ延縄がさかんな浦 延縄漁：サバ・タイ・ヒコデ等 手繰網：スケトウダラ 漕釣漁：ブリ・マグロ等を実施していた。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・カゴ サザエ・イカ類・イサキ
	事例3 島戸浦	戎神社 （●▲蛭子神 二社）	11月第一土曜日 （第一日曜日は島戸八幡宮秋季大祭） （□定日ナシ）	島戸漁港の西の端 切妻平入木造銅板葺　小社 西向（海に面す） エビス木像１体・木造神祠１ （彩色　風折烏帽子　鯛と釣竿を持つ） 石燈篭「献燈大正十三年十月」	島戸八幡宮宮司が戎神社にて神事、その後、御座船に乗船し網代にて神事。一昨年まで大漁旗をあげ、11～12隻の船を出し、角島大橋の下まで行っていた。	手繰網漁がさかんだった浦（大正から昭和10年代には大連・青島を基地に中国・朝鮮半島〔上海・済州島〕でおこなっていた。） 手繰網：スケトウダラ・グチ・ニベ等 延縄漁：ブリ・イカ等 一本釣漁：イカ・ブリ等 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・カゴ サザエ・イカ類・イサキ
	事例4 角島	恵比須神社 （江戸期・明治期の資料に記載無）	5月3日　現在 エビスマツリ 毎月1.15日 大漁祈願 航海安全祈願 エビスマツリの祭日の推移 1950年代 4月5日 1960年代調査 4月20日 1980年代調査 4月21日	角島尾山現在の角島漁協裏 切妻平入木造銅板葺の社祠　西南西向 厳島神社（『防長寺社由来』に記載され、「角島勝安寺にあり、播州明石の鯨組のものが祭祀したもの」と伝える。）と合祀されている。 エビスマツリの日には「恵比須神社」・「厳島神社」の奉納幟が立てられる。 鳥居「昭和十二年四月吉日建之」 新築記念碑献灯「昭和三年四月吉日」 新築記念碑「昭和四十七年三月吉日」	〔内容〕角島エビスマツリ　明治40年に慣行地先水面の漁業権を獲得した記念の漁業祭と一緒に行なう。ゴザブネ（島内でその年稼ぎが一番多かった人の船）に神輿と神主を乗せて、尾山と元山の前海を大漁旗を立ててパレードする。角島では大漁祈願や島の安全祈願のために島内あげておこなう。神輿を乗せた船で網代（シオマキ）を3回左回りにめぐった後、旧道をとおり集落を巡る。途中神輿を辻や地区の境目などで大きく揺さぶるあるいは神輿の下を島内の人はくぐる。神輿と一緒に鯛の飾りのついた山車を担ぎ、島内を練り歩き、ひょうきんな化粧のエビスの格好をしたものが、「叶大漁」の餅撒きをおこなう。なお、その後旧角島中学校前浜では若潮会（昔の青年団にあたる）主催による船競漕（昔は和船競漕オシゴクラ）や魚のつかみ取り大会がおこなわれる。また講堂では島内地区別芸能大会が実施される。 〔由来・伝承〕九州鐘崎から来島した海女が、潜水の前に渚の小石をエビス祠に供えた。 尾山の西村家が明治5,6年頃に石工に頼んで作って祀ってあった「エビス」を明神（夢崎明神）の横に祭祀した。昭和3年に角島郵便局前にあったオムロ（小祠）に移動、その後現在地に移動したものといわれる。なお、筑前大島の海女が漁が終わると１日の感謝の印として積んだ石が夢崎明神の周囲の石垣という。	メノハ（和布）漁をはじめ採貝藻漁が盛んな島。かつては農業主で漁業従であったが、明治40年以降から次第に漁業を中心とした島に変化、平成12年に本土と結ぶ角島大橋が完成し、平成17年には山口県漁協には属さない単独漁協として現在に至る。 磯見・底見漁：ワカメ・ウニ・アワビ等 一本釣漁：イカ・ブリ等 延縄漁：ブリ・イカ等 タイ網・棒受網漁：タイ・イワシ等を実施。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 棒受網・一本釣・採貝藻 イワシ・サワラ・ブリ／ヒラマサ

旧豊浦町	事例5 肥中浦	恵比須神社 （●蛭子社）	4月20日　現在はこの日に近い日曜日 （●毎年二月十日八月十日両度漁祭） ※戦前には11月10日に実施していた	肥中港の端　西向（海に面す） 切妻平入木造銅板葺　小社 エビス木像1体（彩色、色剥げ）・木札「奉鎮斎　言志呂主大神」と木造神祠1 石燈篭 「献燈　昭和十五年十一月十日皇紀二千六百年記念」刻字 狛犬 「昭和十九年十一月十日」刻字	昔は綱引きがおこなわれ、子ども神輿がでていたという。神輿も出て賑わっていたというが、現在では神社にて神事のみがおこなわれ、神輿は出ないという。	肥中港は山口からの肥中街道があり、大内氏時代には中国（明）貿易港として、江戸時代には廻船の寄港地、基地として栄えた浦とされ、純粋な漁浦でないといわれる。 イワシ網：イワシ等 建網：アゴ（飛魚）等 一本釣漁：イカ・ブリ等 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・建網 イカ類・ブリ／ヒラマサ・イサキ
	事例6 特牛浦	蛭子大明神 （記載無）	4月11.12日。 現在この日に近い日曜日 （●旧例毎年三月十一月両度漁業繁久之御祈禱）	特牛港の端「厳島大明神」相殿 南南西向（海に面す） 切妻平入木造瓦葺　小社 石鳥居・石燈篭	神社にて神事のみ。神輿は出なくなったという。40年くらい前までは船に神輿を乗せ、アジロメグリ（網代巡り）をおこなう。現在ではアジロメグリ（網代巡り）はせず、大漁旗をたてる程度。	廻船の寄港地として栄えた浦、大正末期～昭和30年代半ば頃まで石川県等からのイワシ流し刺網漁がさかんにおこなわれた中心地 イワシ網：イワシ等 建網：アゴ（飛魚）等 一本釣漁：イカ・ブリ等がおこなわていた。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・建網 イカ類・ブリ／ヒラマサ・サザエ
	事例7 和久浦	蛭子神社 （▲恵比須社）	4月2日　前夜祭 3日　本祭	和久浦港横小高い山　金比羅合祀　西向 切妻平入木造瓦葺　小社 石鳥居「奉寄進　當浦若者中」刻字 石燈篭「天保六年吉日」刻字	エビスサマの祭りは自治会と浦の祭りだが、主に漁業者がお参りをする。神事をおこない、神輿と子ども神輿が出て浦をまわる。平成24年には子ども神輿は出なくなった。昔から大漁旗を上げるようなことはなかった。 （●蛭子社勧請、年号月日不知、蛭子社は大国玉神と相殿、海上安全浦方の栄久のため、往古浦人より信仰奉り勧請する、浦方惣中の鎮守）	遠洋出漁の浦で明治～大正期にはナガノ（延縄漁）で壱岐・対馬等へ出漁していた。 手繰網：スケトウダラ・グチ・ニベ等 （大正時代に出雲から入ってきたとされる。） 延縄漁：ブリ・イカ等 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 中型施網・枡網・一本釣 アジ・イサキ・イカ類
	事例8 矢玉浦	恵比須神社 （●氣ゑひす社 ▲恵美須二社）	5月21日 前夜祭　22日 本祭 （●毎年11月13日 ▲2月10月 □定日ナシ）	矢玉浦　南西（海に面す）小社 「再建記念之碑 大正十一年十一月十日」 「改修記念之碑　平成三年八月」	エベスサマのマツリは漁業者がおこなう。二宮（神功皇后神社）のタユウサン（宮司）が神事をおこない、終了した後にエビス神社の神札が配られる。船に貼るものもいる。エビスは漁の神様で昔はエビス神社の後ろにあった土俵で相撲をとっていた。 現在は神事のみ、神輿も出ない。昔は神社の後ろに土俵があって相撲をとっていた。昔はエビス神社があるところの奥の川の方に船を入れていたので、漁に出る時は神社の前で手を合わせて行っていたが、昭和40年頃に港が出来てからは船を港に置くようなったので、そのようなことはしなくなった。	遠洋延縄が盛んな浦で明治大正期には壱岐、対馬の近海まで出漁、昭和初期には五島列島、男女群島（長崎県）まで出漁。また明治以降から韓国出漁をおこなう。 サバナワ（鯖延縄）で沖の島、見島（萩）まで出漁していたという。 延縄漁：サバ・レンコダイ・クズナ シイラ漬漁：シイラ (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 棒受網・一本釣・採貝藻 イワシ・サワラ・ブリ／ヒラマサ
	事例9 二見浦	恵比須神社 （▲蛭子社 貳ヶ所）	4月10日 （以前は、この日近くの日曜日に実施。しかし集まらないため平成23年から元に戻す） （▲4月10日）	若宮神社に合祀　南東	恵比須神社は以前は二見浦にあったが、国道191号線が出来るときに、若宮神社に合祀して無くなった。（現在の国道下）	かつては定置網（大敷網）漁がさかんな浦 大敷網：ブリ・アゴ・アジ・サバ・イワシ 大謀網：イカ・イワシ・アジ 壺網：ヤズ・スズキ・チヌ・イカ 延縄漁：ブリ・タイ・イカ等 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・建網・採貝藻 サワラ・サザエ・イサキ
	事例10 湯玉浦	恵比須神社	春3月中旬、昔は夏時期8月盆踊りの時期 （▲5月5日）	湯玉浦の端、大敷網発祥の地記念碑すぐ前の浜　西向（海に面す） 切妻平入木造瓦葺　小社 エビス像 （左端：木像エビス一体 〔彩色手足無〕 中央：木製エビス立像一体 〔彩色無　風折烏帽子・釣竿・鯛、小さな恵比須・大黒像有〕 右端：コンピラ〔箱型〕祭祀）	昔は神輿も出し浦中を廻っていたが、露店や演芸もあり盛大におこなっていたという。今は漁業をする人も少なくなり、エビス祭りに関わる人も少なくなり、神輿の担ぎ手もいなくなり漁協が中心で川島神社（湯玉地区全体の氏神）のタユウサンをよんで神事をおこなうばかりという。 陶器製の木像エビスは対馬に大敷網に行っていた際に持ってきたものという。かつてはエビス講があったというが不明。木像エビスは手足がとれており、昔は漁がない時にエビス像（木像）を船に繋げて、網代を廻っていたためという。 明治4年大敷網をおこなうものが創設した湯玉浦蛭子講があった。現在はなく講は毎年春秋二度事業の発展と紛争がおきないよう大敷網にかかる経費を申し合わせ、同業者の損失がないように定める総合扶助組織的な講であったという。	大敷網発祥の地とされる地域。対馬、壱岐、五島など長崎県、島根県等へ大敷網にて出漁 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 採貝藻・一本釣・建網 サザエ・ナマコ・アワビ
	事例11 小串浦	小島神社 （●恵美須 大明神） （□祭神 言代主神 須佐之男）	7月の「海の日」（祝日）前後の3日間内 ※平成27年には 18日(土) 19日(日)実施 （●毎年6月10日） （▲□ 6月19.20日）	小串漁港の端小島神社社殿内 南西向（海に面す） 御神体不明 石鳥居：「文政四年三月吉日」刻字	「豊浦町小串では、七月一八・一九日に本浦の小島神社（おいべっさん）でエビス祭りがおこなわれる。漁師は各自の船にフラホ（大漁旗）をあげ、ヒトギ餅を二段重ねて六個（計十二個）用意して、お盆にのせて船霊さまにお供えして、豊漁、航海安全祈願をおこなう。ヒトギ餅は餅の原型ともいわれ、白米を一晩水につけ、それを臼でつぶして団子にしたもので、このお供えの後餅まきがあり、それを拾って焼いて食すると夏病み除けになるといわれた。かつては漁業組合を中心に地引網がおこなわれていた。」（『豊浦町史三』p298）とされるが、現在では漁協が中心となってカラオケ大会やビンゴ大会など盛大におこなう。神輿が２日目にエビス神社（小島神社）のところからゴザブネ（御座船）に乗せて海上パレードをおこなう。厚島の手前のところを2.3周右回りに回る。最後に餅まきがある。漁をする人はエベッサンには漁に行く前には頭を下げて行く人もある。	昭和10年頃までイワシ刺し網漁イワシの加工場があり、塩缶詰にしていた。漁場につくと「オエビスさん」といい、「めやす（目安）」を入れて刺し網を流した。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 採貝藻・かご・一本釣 イカ類・サザエ・ヒラメ

事例12 松谷浦	(●戎大明神) (▲蛭子社)	8月6.7日近くの土日 若宮神社夏祭りとして一緒に実施 (●4月朔日 11月14日) (▲6月25日)	若宮神社境内入口左側に小社 (小高い山) 北北西向　入母屋平入木造瓦葺　小社 御神体 左：自然石（貝等が付着）由来不明 中央：エビス木像座像（彩色・風折烏帽子 鯛と釣竿を持つ 竿は無） 右：エビス石像（風折烏帽子 鯛と釣竿を持つ 竿は無） 小社内に奉納絵馬 ⅰ七福神　「昭和五十九年二月吉日」 ⅱタモ網をもって鯛を船に引揚げるエビス（鶴亀の絵付）「昭和五十九年四月吉日　海士組合一同」	若宮神社夏祭り（エベスサンも一緒）におこなう。エベスサマが漁業の神、漁を守る神様。 ワカミヤ（若宮神社）で神事をおこない、カミサンを神輿に移し（神遷）、それから船[ゴザセン：大きな船]に神輿を乗せ厚島付近を廻る漁船のパレードがある。ゴザセンが戻って、その周りを漁船がまわる。その後昼から演芸会がおこなわれる。 「川棚北村向畔　一升枡に恵比寿石を入れて松谷の磯で洗い清める。」（『豊浦町史三』）	昔は延縄（フク縄）・一本釣を主流。魚市場を基盤としフク・タイ等高級魚貝を捕っていた。現在は採貝漁業を潜水漁中心に実施。川棚支店 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 延縄・採貝藻・一本釣 フク・サワラ・サザエ
事例13 湧田浦	和田守エビス神社	春4月1日　秋10月最初の日曜日氏神秋祭と合同 (●毎年4月 午ノ日)	切妻平入木造瓦葺 秋葉、祇園、エビスを合祀した神社	もともとは吉永八幡宮の末社。昔は激しい祭りだった、コウジンサマ（荒神）ともいっていた。御神輿は浜に出して潮を被らせた。祭りを見物する女性をカヨチョウ（神輿担ぎ）が連れてきて、神輿の下に置き、神輿を上下に振っていた。戦後には段々激しくなってきて女性をかどわかすというようになってきたが、その後なくなった。漁業者も減り、平成22年からは和田守神社秋祭りといい、地区の氏神神社と一緒になって祭りをおこなうようになった。漁村センターでわいた保育園の遊戯、カラオケのど自慢、舞踊、大正琴や絵画・俳句の展示会、グランドゴルフ等「和田守神社秋祭り 湧田地区文化芸能大会」と一緒に和田守神社からの神輿の渡御がおこなわれ、集落をまわる。同センター前で神事、最後に餅撒きがおこなわれる。	一本釣り、ノベナワ、ハチダアミ、ヌイキリ（巻網）、カナギ（船曳網）などが盛んな　浦。 昭和35～36年頃はイワシ網を盛んに実施。 江戸期には鰯網漁の合間に農業をおこなっていたといわれ、湧田地区：南、中、北組[30～50人]が出資して網を持っていた。湧田のクワナゲといわれるように、漁の合図があったら田畑をやっていても鍬を捨てて、漁に出ていたという。現在単独の黒井漁協。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 養殖漁・カゴ・採貝藻 養殖ハマチ・タイ・ヌタウナギ
事例14 室津浦	蛭子社 (●子社井弁天社) (▲恵比須社辨才天相殿)	エビス祭りは 11月1.2日 1日前夜祭 今は12月1日 4月10日	室津下港西端甲山の麓　南東(海面) 平入入母屋瓦葺　小社 御神体不明 藍島（福岡）への大敷網組の玉垣	室津恵比寿神社　漁業の守護神「えべっさん」で「えべっさん籠り」の行事がおこなわれる。 ワカミヤ（氏神室津八幡宮境内の若宮神社）で神事をおこない、カミサンを神輿に移し（神遷）、浜の通りに出て、それから船[ゴザブネ]に神輿を乗せエビス社までご神幸がおこなわれる。漁船が大漁旗を立てて、港内でトリカジ（左廻り）に廻る海上パレードもおこなわれる。子ども神輿も出、4.5年前までは子どももゴザブネに乗っていたが、危険ということで神輿だけが乗るようになった。エビス社で浜宮の神事がおこなわれ、最後に餅撒きがおこなわれる。若宮八幡宮に神輿があって室津内を練り歩き、浜に神輿を出していた。 不漁の際には、マンナオシといい、エベッサンのところで思い思い１杯飲む程度して漁祈願をする。 （「蛭子石」といい神棚や屋敷内に祀るという。） （●当浦瓢恵美須にて由緒無）	延縄、定置網（大敷網）、１本釣、漕ぎ（サワラ・ヤズ）をおこなってきた。 大正年間には大敷網で藍島等へ出漁。戦前にはオオシキその後ハチダアミ（八田網：蚊帳を逆さにしたような網）漁（イワシ・アジ・サバ・イカ）。昭和30年頃にはヌイキリ（縫切網）実施。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 採貝藻・一本釣・カゴ サワラ・サザエ・ウナギ
事例15 吉母浦	恵美須堂 蛭子社	5月3日 (▲4月朔日)	以前は港の端（大波戸）のところ（黒島）に堂があったが、埋め立てで昭和52年に現在の場所へ移動した。 切妻平入木造瓦葺　小社　南向 木造エビス立像	エビスマツリという。浦の祭り、漁師のまつりという。今は漁協を中心に地区全体でおこなっている以前は5月１日に祭りがおこなわれていた。オハライサン（タユウサン）だけを船の先頭に乗せ、船にフライ旗を立てて海上パレードがある。小さな神輿があって祭の際には出る。昔は大きな神輿で男ばかりで担いでいたが、男が少なくなったので女性が担ぐようになり、今は子どもが担ぐような小さな神輿になったという。	明治20年以降にはタイ延縄（明治20年以降）3丁櫓の船でオオセンドウを中心に５～10隻で１団を形成し、最盛期には20～30隻で釜山周辺を漁場にした漁をおこなっていた浦。 網漁：サバ敷網・ハマチ網（ハマチ追立網：刺網）・アゴ網（刺網） イソミ（磯見漁）：ヨイサリ（夜間に船上から魚を突く漁）やヨボレ（磯辺を歩きタコ、カレイを突き漁） (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・建網 サワラ・サザエ・アワビ
事例16 吉見浦	龍王神社 (●浦恵美須)	5月11日前後の日曜日 (▲10月10日)	切妻平入木造瓦葺　小社　南西 明治の頃は吉見郵便局のところにあったというが、明治44年頃に大火があり、焼失したために、串山にある石鎚神社（石鎚山の修験山宮）のところの金比羅さんに移し、その後現在の漁協近くに移したという。	現在はエビスは祭祀されておらず、龍王神社になっているという。11月亥の日に祭りがある。H27から近い土曜日ということで11月7日に実施された。10年に一度神輿が出て海上渡御をおこなうという。通年は神事がおこなわれるばかり。 ●浜方信仰のため祭、由緒無	小船が主とした漁で彦島周辺から小瀬戸を漁場にして春にはエソ・甲イカ・フク・車エビ夏にはサヨリ・アゴ・スズキ（6～9月：餌エビ）などの漁をおこなっていた地域。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 一本釣・採貝藻・建網 サワラ・ブリ／ヒラマサ・ナマコ
事例17 安岡本浦	(▲蛭子宮) (□恵美須社 祭神　言代主神)	以前は7月30日、10月15日が祭日。現在は10月19.20日に氏神社である安岡八幡宮の秋祭の日に併せて実施 (□6月16日)	入母屋平入木造瓦葺　小社　南南西 奥に４体石祠有　昭和44年10月に蛭子社再建	神輿や稚児行列がおこなわれる。エビス社がお旅所みたいになっており、安岡八幡宮よりエビス社まで神輿の渡御がおこなわれ、神事がある。昔はコンピラさんと一緒に春におこなわれ、大漁旗（フライ旗）をあげた漁船が港を回っていた。エベッサンは漁師の神様。漁協が中心に今はお祭りをしている。 正月、秋の大祭の際にはエベッサンのところで神事がある。これとは別に6月第３週目の夏時期にオコモリ祭といい、海難事故にあわないようにエビス神社に参詣し、漁師だけが集まり、玉串をあげて一杯飲む神事がある。各自治会の神社総代と漁師総代が参加しておこなう。	江戸期元文年間には鰯建網、狗母網漁（エソ漁：かまぼこの原料になる）、飛魚網、吾智網などの網漁。対馬方面まで鰯延縄で出漁。明治期以降には韓海出漁（朝鮮半島）もおこなう。大正期に下関～小串間の鉄道開通まで、北浦沿岸地域の小串以南の魚市場として繁栄。 戦前までは カネリ（頭上運搬で行商をおこなう女性の魚売り）の浦としても有名な地域であった。戦後、北浦沿岸地域からは下関駅行きの列車にはブリキ缶箱に魚などを入れて行商をおこなう女性の「カンカン部隊」があった。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 建編・採貝藻・イカ巣網 ナマコ・サザエ・タコ
事例18 安岡脇浦	(▲蛭子宮) (□恵美須社 祭神　言代主神)	(□2月2日)	以前は小高いところにエビスはあった。安岡脇之浦町民会館横に石室が神殿（拝殿）があり、その後ろに石祠がある。 切妻妻入木造瓦葺　小社　東北東向 石祠内にご神体は何かを包んだもの。 「慶応三年年五月不動明王祈祷奉修」「明治六年七月・明治十七年八月・明治三十五年七月金刀比羅宮　奉二夜三日祈祷家内安全守護修　海上安全守護修」の神符	エビスは漁師の神様。大漁祈願厄除。エビスマツリは、昔はイワシ網をしていたり、対馬までイカに出たり、網をする人も多くいたので、盛大で神輿が出て浦を回り、シャギリや樽神輿（酒樽の神輿）な今年（平成27年）から神輿の担ぎ手がいないので、拝殿に神輿（昔はもっと大きい神輿だった）を配置し、その前に果物をお供えして氏神社である横野八幡宮から宮司（タユウサン）をよび神事だけをおこなった。なお、夏時期にこれとは別に漁師の安全をおこなうためにハマゴモリをエビス社のところでする。	

旧下関市	事例19 伊崎浦	蛭子神社 戎神社（記載無）	正月10日	亀ヶ浦　トウカエビスという。 切妻平入木造銅板葺　小社　南南西向 木像エビスが祭祀 社左：石祠、右：自然石 これらの石は住吉と龍王を祭祀しているという。 鳥居が二つある。 ①「恵比須」「明治三十九年八月吉日」 ②「戎」「明治卅十二年四月鱈網」	御神体は大亀に乗ったエビスという。それは昔大亀がエベスさまを乗せて竜宮より浦についたため、福の神が到来したのでエビス神社をつくったといわれる。この小祠の一つがこの浦にあがって死んだ亀を供養するために松印にしたといわれる。一年の安全と豊漁祈願のために漁協（山口県漁協伊崎支店）中心に祭りをおこなう。厳島神社のタユウサンがきて笛と太鼓を叩いて神事をおこなって拝む。その後、お神酒が出される。人によってはその酒を飲み、船にもかける。エベスッサンには魚の供養と大漁をかねてお参りするという人もいるが個人個人で違う。不漁のときに酒肴を持って参るもんもいるが、最近はいないんじゃないかという。	平家の落人が住み着いて漁をしたといわれ、タイやブリの底延縄漁船が主かっては大正～昭和期には鹿児島・石川県からのイワシ流し網漁がさかんであった浦。 春にはエソ・甲イカ・フク・車エビ 夏にはサヨリ・アゴ・スズキ等 オドノヨダキ（小戸の夜焚き）といい、夜タイマツ（松の木を干したもの）を船に積んでカガリビ（篝火）を焚いて漁をおこなう。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 中型旋網・わかめ養殖・採貝藻 アジ・養殖ワカメ・ヒジキ
	事例20 彦島 海士郷	恵比須神社	6月10日	入母屋平入木造瓦葺　小社　東向 「明治三十三年五月」棟立建 「平成十八年六月屋根改修」	福岡（箱崎）の方から持ってきたエビス・エベスといわれる。新漁祭、ボラ祭りともよばれて、昔は神輿が出ていた。昔は鳴門海峡まで鯛漁に行き、エビスマツリの時に帰ってきていたという。昔は余興があったり、歌や踊りなど盛大におこなわれていた。しかし、かつては青年団が担いでいた神輿も、その後青年が少なくなり、その時の青年が担いでいたが、今はみな高齢になってしまい、水産大学の人を雇って神輿を担いでもらうようになった。彦島八幡宮の宮司がきて神事をおこなって通りを神輿が神幸する程度。	平家の落人が住み着いた島といわれ、かつては小型底引き網が盛んであった地域 彦島沿岸や蓋井島付近から、遠くは萩の見島付近まで出漁。 網漁：イワシ流刺網・五智網（タイ手繰網） ブリ刺網・エソ刺網・底刺網（イワシ、タイ、サバ、フカ、エビ、タコや貝藻類） 水産製造物：カマボコ、ウニ、肥料 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 第二種小型底引網・ワカメ養殖・ゴチ網 養殖ワカメ・その他エビ・マダイ
	事例21 彦島 南風泊	恵美須	3月15日	山口県漁協南風泊支店横　石祠　南西向 もともとは竹の子島にあったものを昭和58年に現在の場所に移したものという。	エビスはだいたい10日だが、15日にする。漁協（山口県漁協南風泊支店）を中心に実施、彦島八幡宮からタユウサンがきて神事をおこなうばかり。	全国フクの8割が取引されるセリ市がおこなわれる (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 採貝藻・わかめ養殖・第二種小型底引網 サワラ・カワハギ・ブリ／ヒラマサ
	事例22 蓋井島	恵美須	4月 （4月3日、11月3日恵比須籠）	集落西側の浜　現在は公園のなかに小さな社が建ち、そのなかに石がある。この石をエビスとして祭祀する。南西向 木造銅板葺祠　御幣・珊瑚・流木・エビス像・祇園太鼓の像・ワンカップの酒・神鏡等様々なものが社祠のなかに置かれている。	（エビスの神体である）石は11～12歳位の両親兄弟が揃った少年のなかから選ばれ、目を閉じたまま潜水して石を海底からとりあげ、若者頭は目を閉じたまま「ひとふごも」（祭事に使用する莚）に石を包み祠のなかに安置する。エビス籠（恵比須籠）といい、餅を作り、休日、漁協組合広間で酒宴がおこなわれる。不漁が続くと海底から石をとりあげ、過去の神体は祠の片隅によせられ多くなると祠外に重ねられる。」との報告（『蓋井島村落の歴史的、社会的構造』p34-35）があり、神体を更新していく。現在も祭りは実施されているが、カギョウドメ（漁休日）といい、エビスさんに酒をかけ、刺身・大根鱠をあげる程度。	かつては農耕が中心の島、明治中期頃から次第に漁撈に進出してきた島。ヤズ、ブリ、イカ、小鯛等を主とする一本釣漁、延縄漁、刺網漁、ウニをはじめとする貝藻類を採捕する漁業をおこなう。組合では定置網漁も実施。潜水漁業は宗像筑前鐘崎の海女が伝えたといわれる。（明治元年（1868）山の神神事の客人のなかに、鐘崎から海女を率いてやってきた船頭が招かれた記載がある。）島の女性は一年を通し、田畑を耕作、朝は漁獲物を箱詰にして波止場へ運ぶ。3-6月最盛期には建網漁にて夫とともに漁に従事。昭和40年頃から男性も潜水業をおこなうようになる。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 大型定置網・一本釣・採貝藻 アジ・養殖ワカメ・ヒジキ
	事例23 六連島	恵美須社 （▲但石小洞波戸場之脇ニ有之	12月3日 （昔は7月七社祭りの際にもあった）	波止場（北のエビス）、馬島側の山の中腹（南のエビス）、西海岸の「赤ナメラ」の三箇所あったといわれる。いずれもエビスは海からあがった石を積み重ねたものといわれるが、波止場のエビスは現在石祠になっている。南南東向 石祠横に「三界万霊」の地蔵を祭祀した社がある。	漁協中心に酒、肴を持っていき、北と南のエビスにお参りする。不漁が続けば新しい石を海底からあげて祀るといい、網持ちの家の両親揃った家の17,18歳の青年が目隠しをされて潜水し、最初に手にふれた石をあげてくるとされている。（『六連島村落の社会と生活』p7）しかし、現在ではその伝承について確認できなかった。（▲祭り主　嶋中　神体（骨豊）石　石之小洞ニ祭有之）	比較的耕地に恵まれた六連島は明治期には漁業への積極的な進出をおこなわず、耕地を拡大し、蔬菜栽培をおこなう。 (H25「水産統計資料」水揚上位漁業種類・魚種) 桁網・採貝藻・カゴ アジ・ヒジキ・サザエ

（　）内は●『寺社由来』（元文３～４年）／▲『豊浦藩村浦明細書』（安政５～慶応元年）／□「諸社明細書　豊浦藩」『旧豊浦藩神社明細帳』（明治３年）

【下関市市史編修委員会編『下関市史・市政施行―終戦』(1983)および『下関市史・終戦―現在』(1989)、豊浦町史編纂委員会編『豊浦町史』(1979)および『豊浦町史三　民俗編』(1995)・豊北町史編纂委員会編『豊北町史』(1972)および『豊北町史ニ』(1994)・成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい全国エビス信仰調査報告書』（2003）に報告されている事例および筆者調査より作成。

所属：土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム（下関市立豊北歴史民俗資料館長）
E-mail アドレス：yoshidome.toru@city.shimonoseki.yamaguchi.jp